

2010年9月9日

植生学会会長  
福島 司殿

群集に関する検討ワーキング座長  
沖津 進

#### 群集に関する検討ワーキング答申

群集に関するワーキングの目的は、あくまで組成に基づくという群集の基本や国際植物社会学命名規約による群集学名表記法などの群集の本質を植生学会員や社会に広く周知して的確な理解と利用を促すことにある。さらに、群集の学術的、応用的取り扱いを混乱なく円滑に行えるようにするために、学術的背景に基づき、将来に亘って安定し、かつ平易な和名表記を検討する。

ワーキングの基本的合意事項は以下のとおりで、答申の骨子はこれらの合意事項に基づいている：

- 1) 群集の本質や学術的、応用的価値を学会員や広く社会に分りやすく周知することが急務である。
- 2) 植生学会として、今後は群集と上級単位の和名表記法を統一する。
- 3) 対象とするのは国際植物社会学命名規約で正式に認められている群集やその上級単位などの植物社会的な植生単位とし、命名規約上認められていない、和名だけが発表されているものなどは対象としない。また、その他の表記法についても対象外とする。
- 4) 群集和名の取り扱いに関しては、論理的整合性、学術的背景を重視する。

### I. 骨子

#### 1. 群集の理解と広範な利用のための属性検討委員会の設置

- 1) 群集は学術的価値があるのみならず、応用面でも役に立つということを広く社会に示すことが植生学の価値を高めるために必要不可欠である。現状では植生学会員ですら多くは群集の持つ意味や価値、属性を理解していないか、あるいは無関心である。このままでは植生学会が最も重要な根幹的価値として蓄積してきた群集が立ち消えてしまう。こうした、学会が直面している大きな問題を早急に解決する必要がある。
- 2) 前項を踏まえ、群集の持つ学術的価値や応用的有効性を確認、周知するために、群集の属性検討委員会を設置し、群集の属性を評価してとりまとめ、マトリックス作成や各種資料の整理を行い、学会HPなどで広く公表する。
- 3) マトリックス作成などを通じて群集に詳しい、あるいは興味を持つ若手学会員を育成し、場合によっては群集を中心としたモノグラフなどで学位取得の道をつける。
- 4) マトリックス作成や若手育成のために、競争資金の組織的獲得を行う。
- 5) 会員と一般への理解・周知の方策を検討し、努力する。

#### 2. 群集和名の取り扱い

- 1) 今後、群集和名表記は、論理的整合性、学術的背景から、種名の順序を反転させず、学名と同順配列に統一する。さらに、この原則を上級単位の和名にも適応する。

- 2) 既存の研究を尊重するため、過去の文献において先取性が明確なものに限り、前項に関らず学名と反転させた和名表記の使用も認める。
- 3) 論文では、和文においても正式名である群集学名を必ず記載する。
- 4) 学会員および一般の方々が、上記1)の背景を解りやすく理解するために、周知の方法を検討する。周知、理解については今後学会をあげて組織的に取り組む必要がある。

### 3. 学会活動の活性化

- 1) 各種行政関係の委員会などへの学会員の積極的、組織的な送り込みをはかる。
- 2) 属性検討委員会に環境省の参加も要請する。

## II. 議論の過程

上記骨子は、基本的合意事項に基づき、アンケートの意見などを十分に考慮した上で、以下のワーキングでの議論を総合的に検討した結果である。

### 1. 群集の属性検討委員会の設置

- 1) 群集を植生学会員や広く社会に分りやすく周知することが急務である。そのためには、和名表記をとともなう群集のさまざまな属性を分りやすく整理したマトリックスを作成し、学会として責任を持って公表することがよい。
- 2) 群集は植物種多様性を正当に比較検討できる唯一の植物群落単位であり、絶滅が危惧される動植物が含まれる群落の保護や再生にとってなくてはならないものである。環境省の生物多様性戦略への積極的関与も期待できる。
- 3) 植生図の凡例として、優占種を用いると、小地域内で細かく変化するので煩雑になりすぎて、統一基準で厳密に図化することは事実上不可能である。組成に基づく群集を単位にすれば、全国統一基準で無理なく植生図を作成できる。環境アセスメントなどの応用面でも有効である。
- 4) 群集を学術レベルでの確に取扱うことができる若手研究者を育成する必要がある。

### 2. 群集和名の取り扱い

#### 2.1. 和名表記の歴史的経緯

<学名と逆順の和名とする意見>

- ・2種の植物名の組み合わせは中野治房のブナースズダケ、クスーヒカゲヘゴ、オギーカラマツ、ヨシアゼスゲなどが最初のものである。多くの研究者が上層一下層を採用しているということは、この組み合わせが「国語」としてよりふさわしいことを示している。

<学名と同順の和名とする意見>

- ・日本において最初にチューリッヒーモンペリエー (ZM) 方式の群集表記を行ったのも中野治房であり、このときには群集和名も学名と同じ順序で表記している。
- ・日本の植生学は、当初はウプサラ学派の基群叢 (基群集・分群集) 方式である、上層から下層へと優占種を順に並べて群落名として表し、和名もそれと同じ順序で命名していた。しかし、標徴種と優占種の組み合わせで群落名を表記する ZM 方式では、群集を採択し、標徴種が前で主体種が後という表記の仕方変わった。群集和名の場合もウプサラ式の場合と同じように学名の並び順で和名を付けるのが自然である。
- ・「スダジイヤーブコウジ群集」型の群集和名表記は、ウプサラ式から ZM 式への移行期に基群叢と群集が併用されていた頃、基群叢の上層から下層へ優占種を並べて表記す

る方法が習慣として残ったものと推測される。ZM 式の「標徴種－優占種」による群集表記を取り入れた時に、以前の習慣が捨てきれなかったためではないかと思われる。

## 2.2. 日本語としての和名表記

### <学名と逆順の和名とする意見>

- ・種の分類でも和名に命名規約はない。群集和名も日本語の歴史に即して、手軽に親しみ易く呼べるものであるべきだ。
- ・日本語としては上層で優占している種を先に記し、その後に林床にある種をつけるのがわかりやすい。優占種ないしは上層の優占種を先に書くというのが伝統的表記法であることに疑いの余地は無い。

### <学名と同順の和名とする意見>

- ・「スタジューヤブコウジ群集」を日本語の固有名詞と捕らえると、固有名詞は一般に「ヤブコウジースタジイ群集」型が多い（西日本、新大阪）。また、普通名詞と捕らえると「ヤブコウジースタジイ群集」型であるのが一般的である（乗用車、私服、植生学会）。
- ・群集は具体的な存在の植分ではなく抽象化された概念としての植生単位であり、群集名は普通名詞と同様の扱いが妥当である。植物種の和名のつけ方も、大半が「ヤブコウジースタジイ群集」型である。（イヌシデ、アカシデ、スタジイ、コジイ）。

## 2.3. 学術的にふさわしい和名表記法

### <学名と逆順の和名とする意見>

- ・和名はラテン名（群集名）の直訳である必要はない。スタジイが優占する群集ならば、それが頭に來たほうがなじみ易いし便利である。
- ・分類・体系の専門家の議論のためにラテン名があるので、和名にはその機能がなくてもかまわない。

### <学名と同順の和名とする意見>

- ・2 種で構成される群集名（ラテン名）については、まず植分の上層をなす種の属名に「群集」を示す *-etum* を付け、後に置く。その群集を特徴づける標徴種の名前は前に置く。前置する種名はラテン語の接続の変化で後置の種名と連結され、全体で一つの語になる。原名であるラテン語の構造を無視した改変は許されない。
- ・群集は優占種によって区分されたものではなく、「ヤブコウジースタジイ群集」型のスタジイは必ずしも優占種とはかぎらない。群集はあくまで種組成の相互比較によって抽出されるものであり、「優占種を先に記すほうが和名としてわかりやすい」との認識は群集抽出の過程と整合しない。
- ・上級単位に関しては群集から出発した完全な抽象的存在で、しかも体系化の重要な要素である。逆転の必然性がない。また、同一階層の2種を連結した単位名も多い。群集名とおなじ種名を使用しながら群集名と群団名が逆転することも起こる（ムクノキエノキ群集、エノキームクノキ群団）。上級単位の和名は学名と同順とする以外にない。

### <その他の意見>

- ・今後は学術出版物での群集名は学名表記のみとし、和名表記は用いない方法も考えうる。